

現金贈与の社会装置 - キリバス共和国におけるビンゴゲームの役割 -

The role of bingo in facilitating cash donation

:A case study in the Republic of Kiribati

北九州市立大学 今田 文

要旨

キリバス共和国では、さかんにビンゴゲームが行なわれている。ビンゴゲームはマネアバと呼ばれるキリバスの集会所でひらかれ、多くの女性たちが参加している。ビンゴゲームでは、参加者はお金を賭け、ゲームに勝てば配当金を得られる。女性たちは、毎日のようにビンゴに通い、お金を賭けていた。本論文では、なぜキリバスの女性たちが熱心にビンゴゲームに参加しているのか、距離的要因、金銭的要因、規模的要因、社会的要因をもとに検証している。そして、ビンゴゲームはギャンブルでありながら、人々は金銭的要因ではなく、社会的な要因からビンゴゲームに参加していることが明らかになる。

キリバス社会のなかでビンゴゲームは、様々な社会組織において恒常的なあるいは一時的な集金システムとなっている。しかしながら、集金システムによって、参加者は社会組織から一方的に搾取されるわけではない。人々は自らが所属する社会組織への金銭的貢献を目的としてビンゴゲームに通っており、主体的にお金を贈与しているのだ。どの文化においても、理由なく直接お金を渡すという行為には社会的に少なからず問題があり、それを巧妙に忌避する手段が用意されている。キリバスにおいても同様に、現金贈与に関していくつかの手段がもちいられている。そのなかでビンゴゲームは、ゲームを介在させることにより現金のもつ象徴性を薄め、活発な現金のやりとりを可能にしているのである。

目次

はじめに	3-1 キリバスビンゴ概況
1 キリバス共和国概要	3-2 ビンゴに熱中する女性たち
1-1 キリバス共和国	3-3 キリバスビンゴの特徴とは
1-2 アベィアン島	4 ビンゴの目的
1-3 集会所マネアバ	4-1 会場を選ぶ要因
2 ビンゴゲームの概要	4-2 ビンゴに行く要因とは
2-1 ビンゴの歴史と伝播	4-3 主催者と金の行き先
2-2 ゲームのルール	4-4 ビンゴの目的とは
2-2-1 ビンゴカード	5 考察
2-2-2 ゲームの進行	5-1 集金システムとしてのビンゴ
2-3 主催者、賭け金、配当金	5-2 ギャンブルに隠された寄付行為
2-4 ジャックポットの存在	5-3 可能になる現金贈与
3 キリバスビンゴの特徴	終章 結論

はじめに

キリバス社会のなかでビンゴゲームは、様々な社会組織において恒常的なあるいは一時的な集金システムとなっている。しかしながら、集金システムによって、参加者は社会組織から一方的に搾取されるわけではない。人々は自らが所属する社会組織への金銭的貢献を目的としてビンゴゲームに通っており、主体的にお金を贈与しているのだ。しかし、人々から、ビンゴゲームへ参加するのは金銭的貢献が目的であると語られることはない。逆に、「お金を稼ぎに行こう」などと、お金を得ることが目的であると語られる。

本稿では、キリバスにおける集金システムとしてのビンゴゲームについて論じる。そして、人々は表向きにはギャンブルとして、娯楽としてビンゴゲームを楽しんでいるが、そこには寄付という社会組織への貢献と、キリバス社会

の平等性が隠されていることを明らかにしていく。

この論文は、2002年9月と2003年7月から9月までの計4ヶ月の調査で得られたデータをもとにしている。筆者は首都のあるタラワ島の北に位置するアベィアン(Abaiang)島スワラブ(Tuarabu)村に主に滞在し、女性たちとビンゴに通い、参与観察を行なった。

1 キリバス共和国概要

1 - 1 キリバス共和国

キリバスは中部太平洋に位置する島嶼国家である。東西に長く、西からギルバート諸島、フェニックス諸島、ライン諸島の3諸島から成り立っている。首都はタラワであり、ギルバート諸島に属する。人口は84,494人(Oseania Population 2002)。公用語はキリバス語と英語であり、キリバス語は地方によって若干の差が

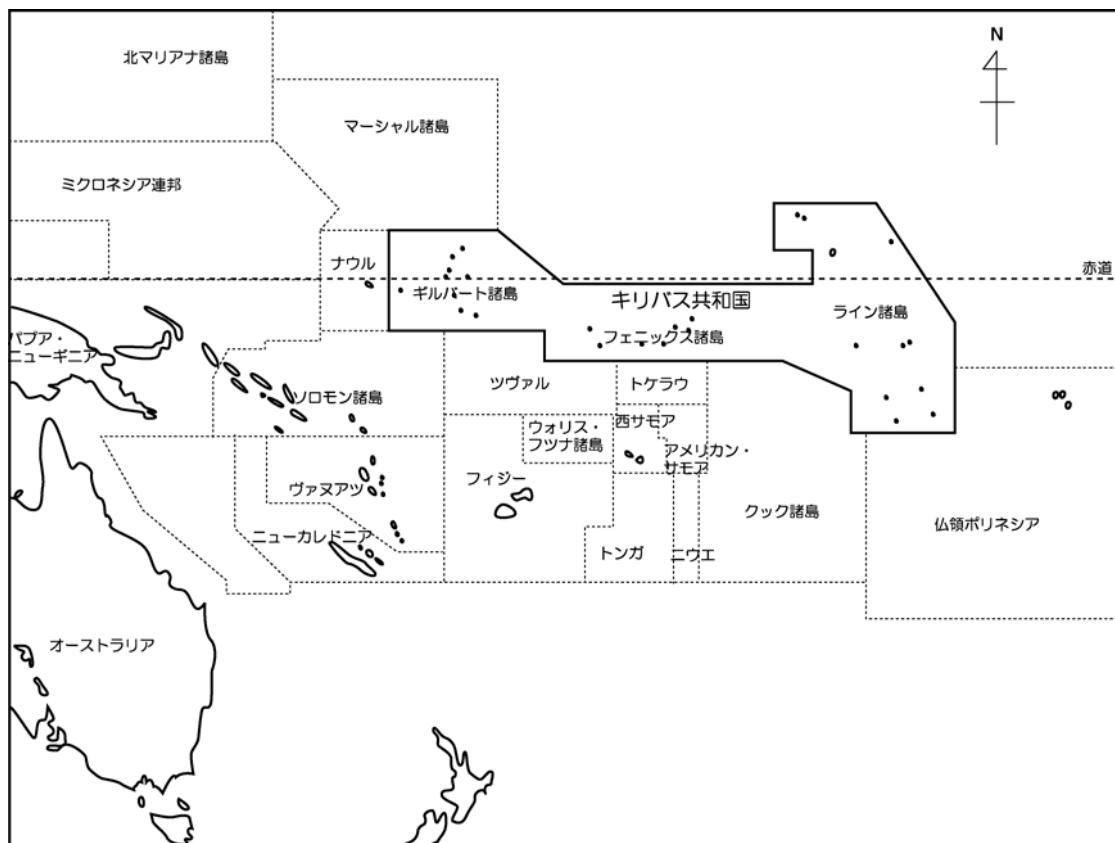


図1 キリバス共和国の位置

ある。宗教はキリスト教信者が多く、統計によれば人口の約 50%がカトリック、約 40%プロテスタントとなっている。通貨はオーストラリアドル。国民一人あたりの GNP は約 950US ドルである。

1892 年ギルバート及びエリス両諸島がイギリスの保護領となり、1916 年には正式に植民地となった。その後太平洋戦争が勃発し、1941 年日本軍によってバナバ島、タラワ島、マキン島、ブタリタリ島が占領された。第二次世界大戦後、独立への準備がすすめられ、1978 年エリス諸島が分離し、ツヴァル国となった。そして、1979 年ギルバート諸島植民地がキリバス共和国として独立した。

1 - 2 アベィアン(Abaiang) 島

アベィアン島はギルバート諸島北部に属し、首都のあるタラワ島の北に位置する。北緯 1 度 45 分、東経 173 度付近にあり、北西から南東に

細長い環礁である。面積は 17.48 平方キロメートル。14 の村があり、人口は約 4500 人である。空港のあるスワラブ(Tuarabu)村の北にタブラオ(Taburao)村があり、ここに島政府の事務所や診療所などが置かれている。

首都からの交通手段は飛行機か小型定期船である。飛行機は南タラワから週 3 便運行している。小型定期船は南タラワのベシオ(Betio)港とスワラブ村を結ぶ St. Ioteba 号と、ベシオ港とテブギナコ (Tebunginako) 村を結ぶ Taakenraoi 号があり、どちらの船も週 3 便程度運航している。その他交通手段として、不定期の貨物船が運行している。

首都からの物資を運ぶ手段として、小型定期船が利用されている。船には米や小麦粉、砂糖、缶詰などの食料が積まれる。島から首都への便には、ココナッツ、バナナ、パパイヤなどが乗せられる。貴重な現金収入源であるコプラは、貨物船に積み込むことが多いのだが、定期小型

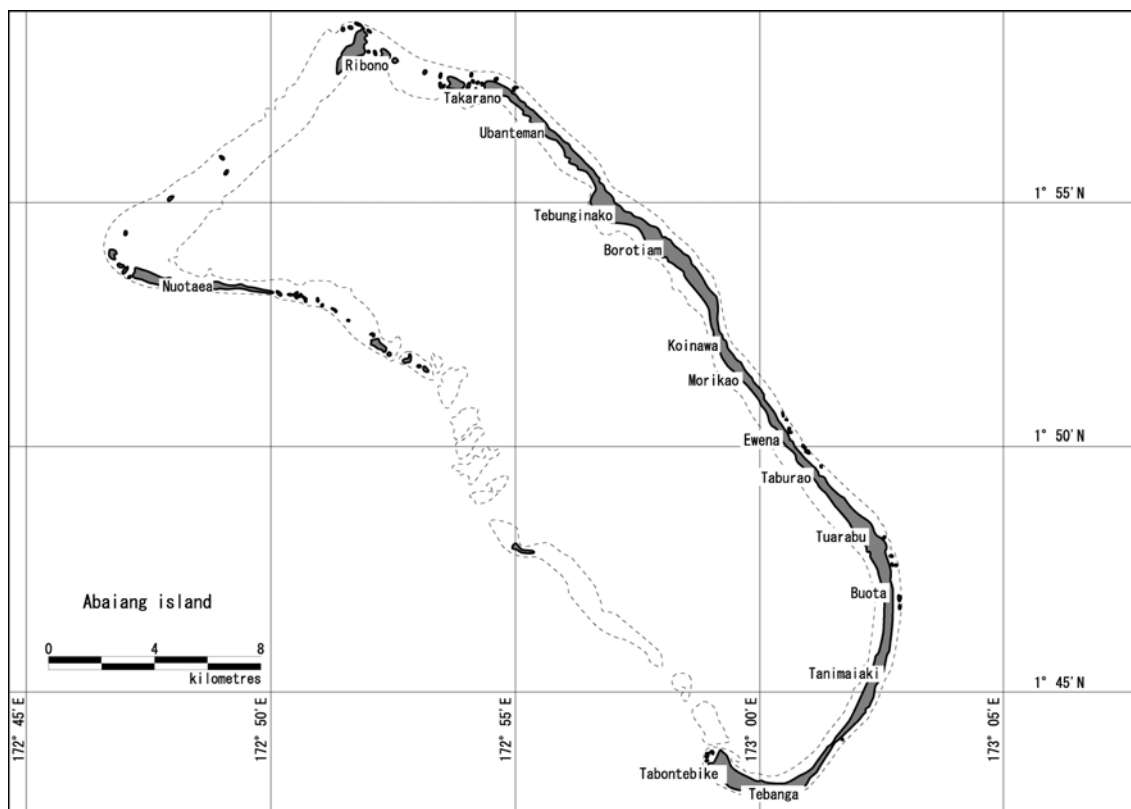


図2 アベィアン島

Land and Survey Division 1980 Map: Abaiangより改変

船が使われることもある。島で現金収入を得る手段は、不規則の賃労働や、コブラ、ロブスターなどの収穫物を首都に売りに行くなど限られている。島の人々は、首都で働く人からの送金や、ドイツの貨物船や日本の鰹漁船の乗組員からの送金を頼りにしている。

[スワラブ(Tuarabu)]

スワラブ村はアペアン島の中南部に位置する。村には空港があり、また小型定期船の始発点になっているため、交通の便がよい。村の北側にはタヴィロア(Tabui roa)と呼ばれる地区があり、高校や郵便局がある。スワラブ村の人口は約400人。住民のほとんどがカトリック教徒である。本調査は、スワラブ村のブオタ地区とタヴィロア地区を中心に調査をおこなった。

1 - 3 集会所マネアバ

ビンゴゲームの多くはマネアバ(maneaba)でおこなわれる。マネアバとは集会所を意味するキリバス語である。僅かな例外を除いて通常、入母屋形式の屋根をもつ巨大な建築物である(風間 2003)。キリバスでは大小さまざまなマネアバを見ることができる。マネアバは、村や宗派別のキリスト教会、行政府や学校などにそれぞれ付随している。筆者の滞在したスワラブ村には、村マネアバ、カトリック教会マネアバ、高校マネアバがある。

マネアバでは、組織運営のための合議や報告会が行なわれる。村や教会などの運営に関して、あらゆる事柄が集会所の合議によって決定されるのである(風間 2003)。マネアバでは、長老や既婚男性が中心となり、運営を行なっている。人々は自らが所属している社会集団のマネアバへ集まり、饗宴(botaki)を開いたり、長老

会議で決定された共同作業などを行なっているのである。

このように、キリバスの人々にとって自らが所属する社会集団のマネアバの存在や、マネアバで決定される事柄が生活の中で重要なものとなっている。そのため、マネアバで開かれるビンゴゲームは、社会集団に所属する人々にとって欠くことのできない共同作業といえる。

2 ビンゴゲームの概要

この章では、キリバスで行なわれているビンゴゲームについて、歴史やルールについて述べていく。

2 - 1 ビンゴの歴史と伝播

ここで、Roger の『Gambling Times Guide to Bingo』から抜粋により、ビンゴの歴史と伝播について触れておく。

ビンゴの起源はイタリアであり、1530年代にイタリアでロトの一種として誕生し、"Lo Giuoco de lotto"と呼ばれていた。その後徐々にヨーロッパ全域に広まり、1778年フランスの出版物には知識階級の道楽としてロトが報告されている。1800年代にロトは教育に使われるようになり、カードは子どもたちにつづりや数字、動物、歴史を教える目的でデザインされたものだった。

1929年ビンゴは北アメリカに持ち込まれ、"beano"として知られるようになった。この頃使われていたカードは、縦、横、斜めのいずれか一列の数字を全てそろえると、勝ちになる型になっていた。その後、beanoが変化してbingoと呼ばれるようになったといわれている。

教会でビンゴが行われる契機となったのは、ペンシルバニア州にあるカトリック教会の牧師が、教会の運営資金を生み出す手段として、ビンゴが使えないか玩具メーカーの社員に相

談したことである。そして、ビンゴは教会で行なわれはじめ、非常に人気のあるゲームとなった。(Roger Snowden 1986)

キリバスにビンゴがいつ頃、どのように伝わったのか、定かではない。いつ頃からビンゴゲームをしていたのかビンゴゲームの参加者に尋ねたのだが、20代後半の女性が「私が小さかったころにはビンゴはあった」と述べていた以外には、わからないという返答ばかりであった。しかし、カトリック教会の下部女性組織が主催するビンゴ会場の多いことから、カトリック教会がキリバスにビンゴを持ち込んだと考えられる。つまり、キリバスでは、はじめから教会の運営資金を生み出す集金手段として、ビンゴゲームが導入されたようだ。

2 - 2 ゲームのルール

2 - 2 - 1 ビンゴカード

日本で一般的なビンゴは縦、横が 3×3 マスもしくは 5×5 マスのカードを用いる。そのカードで縦、横、斜めの数字が 1 列すべてそろえば、勝者となる。しかし、キリバスのビンゴカードは、これとは異なる。キリバスで使われるビンゴカードは、縦 18×横 9 のマスがある。カードは上から 3 行ずつでくくられ、大きく 6 つの枠に分かれる。このワクは 27 マスで構成され、それぞれの横の行に 5 個の数字が並ぶ。

このようなビンゴカードは、古いタイプのビンゴカードであり、18 世紀のフランスで用いられていたカードと類似している (Roger Snowden 1986)。

キリバスで使われているビンゴカードは、売られているものと、自分で作るものがある。売られているのは主にニュージーランド製の、一綴り 11 枚のものであり、首都の大きなビンゴ会場で売られている。首都の大きな会場以外

では、参加者が自分でカードを作っている。カードの材料はダンボール紙やノートの表紙である。このような硬い材質の紙はなかなか手に入らないため、人々は大事に使っている。マークは白い貝殻や石を使い、カードは再利用される。

2 - 2 - 2 ゲームの進行

ここで、一般的なゲームの進行について説明しておく。

ゲームでは、主催者によって読み上げられた数字にマークをしていく。ランダムな数字の出し方は 2 通りある。首都の大きな会場の場合、ビンゴ専用の電光掲示板があり、機械がランダムに数字を出す。その他の小さな会場では、ペットボトルにいれた数字の玉を出していく。

1 ゲームで基本的に 2 人の勝者が出る。最初に横 1 行の 5 個の数字がそろった者が、ファーストビンゴの勝者となる。そして、大きな枠の 15 個の数字が最初に全てそろった者が、セカンドビンゴの勝者となる。

1 枠	6	15			40	53		75		
	8		25	35	44				90	
		19	28		49	55			77	
			12	21	33			61	70	
			16		38		58	62	80	
	7		27				59	68	84	
		10		30	42				71	81
	3		23	37				66	72	
	4		26				51		79	89
			11		31	41	50			83
			13			46	52	60		86
5				39	48		64	78		
1	18	20					67	74		
2		24	34			57			85	
		29	36				69	76	88	
		14	22	32	43		63			
9	17				45	54			82	
					47	56	65	73	87	

図 3 ビンゴカード

ファーストビンゴやセカンドビンゴの勝者は、「ビンゴ」と大声で宣言する。そこで、主催者側の人間が宣言した者のところへと行き、そろった行もしくは枠の中の数字を大声で読み上げる。間違いがなければ、ファーストビンゴの場合はゲームが進行され、セカンドビンゴの場合はゲーム終了となる。

2 - 3 主催者、賭け金、配当金

キリバスで行なわれているビンゴゲームには、ごくわずかな例外を除いて主催者がいる。キリバス在住の小野賢太郎氏の話によると、教会マネアバで開かれるビンゴゲームのほとんどが教会下部組織の女性団体主催のものであるという。その他には、村が主催するものや、冠婚葬祭などの準備のために個人が主催するビンゴゲームがある。

主催者はビンゴゲームをマネアバなどで開く。また、主催者は賭け金、配当金の比率を決定し、会場内での金のやり取りをつかさどる。主催者はビンゴゲームの売上の一部を取り分としている。筆者の調査によると、ある会場での主催者の取り分は、総賭け金の約3割であった。

キリバスで行なわれるビンゴゲームでは、ほぼ全ての会場でお金が賭けられる。賭けられる金額は、ゲーム会場や時間帯など、その時々で異なる。一般的には1ゲーム30セントから70セント程度である。1ゲームごとにお金を賭け、勝者は配当金を得る。1ゲームごとに賭け金が異なり、それに対応して配当金も変わる。アベィアン島スワラブ村の教会ビンゴでは、30セントを賭けると、ファーストビンゴで2ドル50セント、セカンドビンゴで5ドルの配当金を得ることができた。

ゲームではファーストビンゴ、セカンドビン

ゴともに同時に複数の勝者が出る場合がある。スワラブ村の教会ビンゴでは、複数人の勝者が出た場合、配当金はその人数で等しく分けられていた。

キリバスで行なわれているビンゴゲームでは、賭ける人の数に増減があっても勝者の人数が固定されている。また配当金に関して、賭けられたお金や人数に連動することはなく、配当金の額は固定されている。参加者の人数が増えるほど、配当金の期待値が減る仕組みになっているのだ。しかし、実際には会場に多くの人々が集まってゲームに興じている。期待値が減るにもかかわらず、会場に多くの人々が集まる理由の1つには、高額な配当金が得られる特別なゲームの存在があると考えられる。次節では、高額な配当金が得られるゲームについて述べる。

2 - 4 ジャックポット(Jack Pot)の存在

ビンゴゲームでは通常の勝敗に加えて、ジャックポット(JackPot)と呼ばれる高額配当のゲームがある。ビンゴゲームでは、勝者に配当される額は賭け金の一部にすぎない。そのため、主催者には取り分を除いても、多額のお金がたまり続ける。そのお金がある程度の額になると、一部がジャックポットとして、ゲームの勝者に支払われる。

ジャックポットの仕組みは、次の通りである。ゲームが始まる前にある任意の数字ひとつが示される。その数字がセカンドビンゴまでに出なければ、セカンドビンゴの勝者に通常の配当金に加えて、ジャックポットの特別な配当金が支払われる。任意の数字がセカンドビンゴまでに出てしまった場合には、ジャックポットの配当金は次の回にまわされる。

ジャックポットは1日に2回程度行なわれる。

ジャックポットが出なければ、通常の配当金と主催者の取り分の約3割が除かれた額が上乘せされ、次の回にまわされる。ジャックポットが出てしまうと、ジャックポットの額は0にもどる。一定以上の額がたまると、再びジャックポットが行なわれるようになる。このジャックポットは、大きな会場になると配当金が1000ドルを超すことがある。また、小さな会場でも100ドル程度まであがることもある。

ジャックポットは時に、現地の人々にとってきわめて高額な配当金をもたらす。そのため、人々はジャックポットの配当金に関して、常に注意をはらっている。ジャックポットの配当金がつり上がるにつれ、ビンゴ会場に集まる人数が増える。かつて配当金が1000ドルを超したビンゴ会場へ行ったことのある男性は、「マネアバ内だけでなく、マネアバの周囲にある家々の軒下、家の中にまで人々がおしかけ、歩く隙間もないほど人が集まった」と語った。ジャックポットはビンゴゲームに人々を惹きつける要素の1つとなっている。

3 キリバスビンゴの特徴

3 - 1 キリバスビンゴ概況

タラワ島の南部やアベィアン島では、夕方になるとそれぞれの村でビンゴゲームが行なわれ、熱中している女性たちの姿がよく見られる。ビンゴゲーム会場は、カトリックの教会に付随するマネアバで開かれていることが多く、集落内のマネアバや高校マネアバなどでもビンゴゲームをしている姿が見られた。アベィアン島では各村や集落ごとにビンゴの会場があった。首都のタラワ島では、カトリック教会のマネアバで行なわれていたほか、深夜に小さなマネアバで行なわれていた。マネアバのほかには、民家や職場などでビンゴが開かれていた。タラ

ワ島にある国立病院の事務所で、医師や看護師が集まってビンゴゲームを行なっているのを見かけたこともある。

夕方になると人々は連れ立ってマネアバに行き、ゲームにふける。調査をおこなった村の教会マネアバでは、曜日に関わらずほぼ毎日ビンゴゲームがひらかれていた。いつも使う会場が他の行事で使えなくなることはあるが、そうした時は別会場に移して行なっていた。ビンゴが開かれないのは、他の行事に大半の村人が参加している場合である。このようにキリバスでは、人々にとってビンゴゲームがきわめて日常的なものとなっている。

3 - 2 ビンゴに熱中する女性たち

ビンゴ会場が目立つのは、女性たちの存在である。調査を行なったマネアバの多くで、女性の参加率が非常に高かった。参加者の人数が多い会場では、毎日200人以上の人々が集まる。それよりもやや人数の少ない会場では、30人から50人程度が集まる。人数の最も少ないものでは、5人ほどの会場もあった。興味深いのは、参加者人数の多い会場ほど、参加者における女性の割合が高くなることである。

参加者人数の多い会場の場合、参加者の9割以上が女性である。また、参加者人数が30人から50人の会場では、8割以上が女性である。人数の少ない会場では、男女の割合が半々になる。参加者人数の多い会場のビンゴほど開催が常態化されており、人数の少ない会場のビンゴは不定期なものが多い。つまり、常態化している会場には女性の参加者が多く、不定期なものに男性の参加者が多いのだ。

女性たちはある一定の決めた額を、毎日ビンゴゲームに費やしていた。1日に使う額は、2ドルから3ドルという人が多くみられた。その

総額は人によって月の収入の1割から2割におよぶ。なかには10日間でビンゴに50ドル費やした例もある。50ドルという金額は、島の生活において高額である。しかし、50ドルという多額のお金をビンゴで使い果たしてしまったにもかかわらず、その女性は娘たちに笑い者にされただけだった。一方男性は、ビンゴゲームに参加することすら稀である。男性のビンゴゲームへの参加日数は、1ヶ月でせいぜい5日程度であり、そもそもビンゴゲームに参加しない人がほとんどである。男性たちのビンゴゲームに費やす金額は、女性たちの費やす金額に比べて圧倒的に少ない。

また、女性たちはゲームに熱中し、ゲームの進行を妨げるような騒音などに対し、非常に敏感である。時に会場で遊んでいる子どもが泣き出すことがある。その際には、母親に激しい罵声があびせられる。ゲーム進行役の数字を読み上げる声が小さい、あるいは読み上げる速さが速すぎる場合にも、いらだちの混じった怒声が聞かれる。

このように、キリバスのビンゴゲームでは、女性たちが非常に熱心にビンゴゲームに通い、ゲームに熱中し、お金を費やしている。

3 - 3 キリバスビンゴの特徴とは

この章ではキリバスでおこなわれているビンゴゲームの特徴について述べてきた。まず特徴として、マネアバで行なわれていることがあげられる。人々にとってマネアバは生活の中で重要な存在であり、ビンゴゲームはその重要な場所で行なわれているのである。

さらに特徴として、ビンゴゲームが必ずどこかで毎日開かれていることがあげられる。ビン

ゴゲームが行なわれているマネアバには、多いところでは200人以上の人々が毎日集まっている。また、人数が少ないマネアバや事務所などでもビンゴゲームは開かれており、キリバスの人々にとって欠かせないものとなっている。

そして、多くの女性がビンゴ会場へ通っていることである。毎日のように通う人もいれば、月の半分程度という人もいる。しかし、会場の8割、9割を女性が占めていることを見れば、多いといえる。

一方、男性は女性ほどビンゴゲームに参加しない。ビンゴゲーム開催が常態化している会場には女性の参加者が多く、開催が不定期なものに男性の参加者があるのも特徴のひとつである。興味深いのは、開催が常態化しているビンゴゲームには必ず主催者がいるのだが、不定期なものには主催者がいないものもある。男性は、深夜に少人数で開かれていたものや後述する高校ビンゴのような主催者のいない、もしくは明確でないビンゴゲームにおいて割合が高い。

女性たちはなぜ、日々ビンゴゲームに熱中しているのだろうか。そして、なぜ男女の割合が会場で違うのだろうか。人々が会場を選ぶ要素をもとに、なぜこのようなことが起こるのか次章以降で検証していく。

4 ビンゴの目的

ビンゴに通う人々は、何を基準にしてビンゴに行くのだろうか。この章では、普段1つのビンゴ会場しかないアベアン島スワラブ村に3つの会場ができた10日間の様子から、会場を選ぶ要素について考察する。対象としたのは、9月4日から17日までのうち、9月10日から13日の3日間を除く、10日間である。

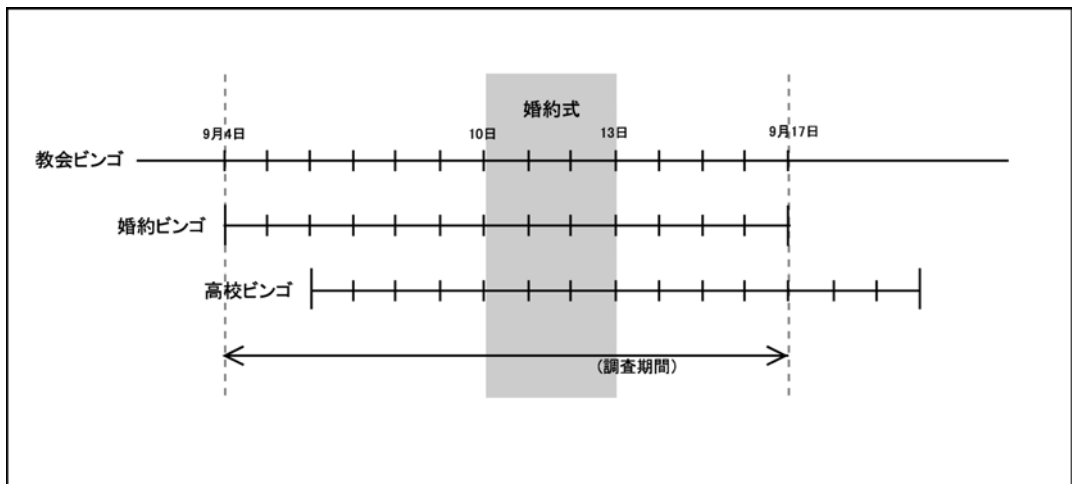


図4 3つの会場ができた期間

また、スワラブ村内に住む5人の女性たちK、A、T、M、Bを例にとり、詳しく分析していく。K、A、Mは実の姉妹であり、Tはこの3人の実の母親である。BはTの息子の配偶者であり、K、A、Mとは義理の姉妹の関係にある。なお、Bは婚約ビンゴの主催者と親族関係にある。

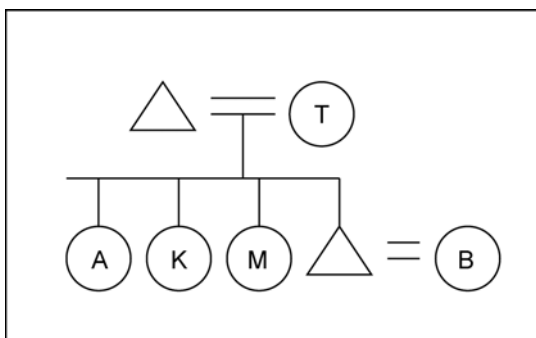


図5 人物関係図

4 - 1 会場を選ぶ要因

スワラブ村では、8月の終わりに3つのビンゴ会場があった。1つは普段から教会が主催し、教会マネアバで行なわれていたものである(以下 教会ビンゴ)。2つ目は婚約式をひかえた女性の家が主催し、この女性の家で行なわれていたものである(以下 婚約ビンゴ)。そして、高校のマネアバで行なわれていたものである(以下 高校ビンゴ)。この高校マネアバで行なわれていたビンゴの主催者はわからなかった。婚

約ビンゴは、婚約する女性側の家のみで開かれ、男性側の家では開かれなかった。これは、婚約する男性の父親が教会の幹部であることと関連があると思われる。

参加人数は教会ビンゴが、1日約40人。婚約ビンゴは、1日約25人。高校ビンゴの参加者は1日約5人であった。教会ビンゴの参加者は主に婚約する男性側の親族と普段から教会マネアバへ行く人々であった。婚約ビンゴの参加者は婚約する女性側の親族と、普段教会マネアバへ行く人の一部であった。高校ビンゴの参加者は男性がやや多く、高校の教員や高校周辺に住む人、首都から帰省している人々であった。

教会ビンゴの参加者は、この10日間で人数が増えていった。首都や周辺の島から帰省している人や、婚約する男性側の親族が参加していたことから、ジャックポットの額が上がり続けていたからである。婚約式が行なわれた3日間は、村人総出で式が執り行なわれたため、この期間はいずれの会場もビンゴが開かれなかった。しかし、婚約式が終わった次の日の9月14日は、教会ビンゴのジャックポットの額が70ドルとなっており、参加人数が急増した。そして、14日にはジャックポットが出ず、9月15日のジャックポットの額が100ドルとなった。ジャック

ポットの額が 100 ドルとなった日、参加人数は 100 人を超えた。

対象とした 10 日間に人々が 3 つの会場からの会場を選んでいったのか、距離的要因、金銭的要因、規模的要因、社会的要因をあげ分析をおこなう。距離的要因が強ければ、人々はビンゴゲームを単なる娯楽として楽しんでいるとみなすことができる。また、より高額な配当金を得ることを目的としているならば、金銭的要因が強くなり、ゲームで勝つ確率を重要視しているならば規模的な要因が強くなると考えられる。そして、ビンゴゲームを主催する社会組織を重要視していれば、社会的要因が強くなると仮定できる。

距離的要因

3 つのビンゴ会場の位置は、以下の通りである。教会マネアバから婚約を行なう家までは北へ約 400m 離れている。婚約式を行なう家から高校マネアバまでも約 400m 離れているという位置関係にある。

ビンゴに通う手段は、ほとんどの人が徒歩である。一部の人がバイクや自転車で通っていたが、少数であった。なお、アベリアン島ではバスなどの公共交通機関はない。

K、A、T、M、B の 5 人を例にとってみる。この 5 人のうち K、T、B の家は同じ位置にあり、高校ビンゴの会場と婚約ビンゴの会場まではほぼ同じ距離である。そして、教会ビンゴの会場が最も遠い。M は高校ビンゴの会場のすぐそばに家があり、婚約ビンゴ会場、教会ビンゴ会場の順に遠くなる。A は婚約ビンゴ会場のすぐそばに家があり、高校ビンゴの会場と教会ビンゴの会場まではほぼ同じ距離である。

ほぼ同じ場所に住む K、T、B のうち、K と T は教会ビンゴ以外には行かなかった。B のみが

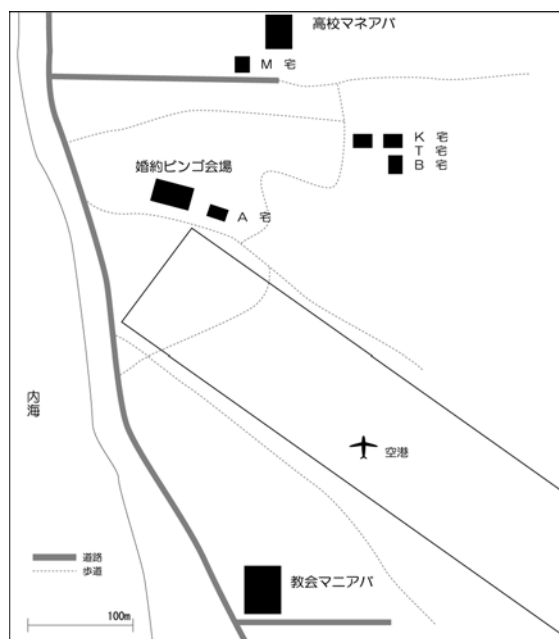


図 6 位置関係図

10 日間のうち 1 週間、婚約ビンゴに通っていた。K、T、B の 3 人とも高校ビンゴには行かなかった。

M は高校ビンゴの会場が最も近いのだが、高校ビンゴには一度も行かなかった。婚約ビンゴには 1 日のみ参加し、ほかの日は教会ビンゴに行っていた。A は婚約ビンゴの会場が最も近いのだが、婚約ビンゴには一度も行くことはなく、教会ビンゴにしか行かなかった。

5 人は「遠いから歩くのが大変だ」と語ることはあっても、遠いから行かないということではなかった。また、ジャックポットの額が大きくなるにつれて、2 つ先の村から歩いて通う人がいた。この 2 つの事例からも、ビンゴ会場までの距離はビンゴ会場を選ぶ要因とはならないと考えられる。

金銭的要因

3 つの会場は賭け金の額やジャックポットの有無が違う。教会ビンゴは賭け金が 30 セントから 80 セント。1 日のうちでも時間が遅くなると賭け金の額が上がる。30 セント賭けるとファ

ーストビンゴで2ドル50セント、セカンドビンゴで5ドルの配当金を得ることをできる。ジャックポットの額は3つの会場ができた日の20ドルから、婚約式の2日後の100ドルまで上がりつづけた。

婚約ビンゴは、賭け金40セント。40セント賭けるとファーストビンゴで3ドルの配当金が得られ、セカンドビンゴで5ドル30セント程度であった。ジャックポットはなく、主催者にたまるお金は婚約式の資金に回っていた。

高校マネアバでの賭け金、配当金についてはわからなかった。

婚約ビンゴには30人前後の人が入っていたが、教会ビンゴでのジャックポットの額が70ドルを越えると、多くの人が教会ビンゴに移動した。ジャックポットが100ドルになった日、婚約ビンゴには人がおらず、みな教会ビンゴに集まっていた。婚約ビンゴの参加者は、ジャックポットが出てしまった後に、婚約ビンゴの会場に戻り、ビンゴをしていた。

賭け金と配当金の額が、婚約ビンゴと教会ビンゴでは若干の違いがある。特にジャックポットの有無が、大きな違いである。ジャックポットの額が100ドルになった日、婚約ビンゴから教会ビンゴへと人が流れたことから、人々が大金を得ようとしていた様子がうかがえる。このことから、金銭的な要因はビンゴ会場を選ぶ要因の1つとして考えられる。

しかし、ジャックポットの額が高額でない限り、婚約ビンゴの参加者が婚約ビンゴから教会ビンゴへと流れなかった。人数が教会ビンゴよりも少ない分、婚約ビンゴのほうが期待値は高い。そのため、普段は婚約ビンゴに行き、ジャックポットのときだけ教会ビンゴに行くというのは、お金を得る目的であれば賢明な手段である。

ではなぜ、人数の多い教会ビンゴから人数の少ない婚約ビンゴへは人が流れなかったのだろうか。次に、参加者の人数に注目し、規模的要因について考えていく。

規模的要因

3つの会場は人数の規模が異なる。参加人数は、教会ビンゴが多い日で100人を超え、少ない日で30人前後であった。婚約ビンゴは25人から40人。高校ビンゴは5人から10人であった。教会ビンゴと婚約ビンゴの参加者は9割以上が女性であるのに対し、高校ビンゴは男性が6割ほどいた。

10日間で教会ビンゴと婚約ビンゴの参加人数は、どちらも少しずつ増えつづけた。婚約ビンゴの会場は30人もはいると満員になる。参加人数では教会ビンゴに劣るが、毎日熱気に満ちていた。教会ビンゴの会場は、普段から30人から40人はいるのだが、ジャックポットの額が上がると100人を超え、異様な熱気に満ちていた。

Mは婚約式前の1週間のうち、婚約ビンゴへ1日、教会ビンゴへ6日間通っていた。Mが教会ビンゴの会場へ行った日に、なぜそちらに行ったのか聞いたところ、「今日はこっちのほうがいいと思った」という理由であった。後日、筆者がMは婚約ビンゴへも行っていたことを思い出し、理由を聞いたところ、「早く始まっていたから」と答えた。さらに話を聞いてみると、婚約ビンゴへ行った日は、婚約ビンゴに行ったあと、教会ビンゴにも行ったということだった。その日、教会ビンゴよりも婚約ビンゴのほうが早く始まっていたため、Mは婚約ビンゴへ行き、ビンゴをしていたのだった。しかし、途中で婚約ビンゴから教会ビンゴに移動したという。

規模の大きい会場を選んでいる事に関して、

次のようなことが考えられる。教会ビンゴは婚約ビンゴや高校ビンゴに比べて、参加者の人数が多い。ビンゴゲームでは、参加人数が多いほど期待値が低くなる。しかし、あえて人数の多い教会ビンゴを選ぶということは、規模の大きさ以外の要因によって人々が会場を選んでいる可能性が考えられる。つぎに、社会的な要因について考えてみる。

社会的要因

3つの会場のうち、婚約ビンゴの会場には、周辺の村や島からやってきた婚約する女性の親族の姿が多く見られた。普段から教会ビンゴへ通う婚約する女性の親族は、教会ビンゴか婚約ビンゴの会場のどちらかを選んで様子だったが、婚約する女性に近い親族関係の人は婚約ビンゴへ行く日が多かった。

婚約する男性側の親族の多くは、教会ビンゴの会場へ行っていた。婚約する男性の父親は教会の神父であり、男性側の親族たちは教会マネアパで寝泊りをしていたからである。普段から教会ビンゴに通う男性側の親族は、会場を変えることがなかった。

Bは婚約をする女性と親族関係にあった。Bは普段教会ビンゴに参加するのだが、婚約式前の1週間は婚約ビンゴに参加していた。Bに理由を聞いたところ、「私は彼女(婚約する女性)の親族だから」と答えた。

では、婚約する男性と女性の親族ではない人々は、どのように会場を選んでいるのだろうか。Kは婚約する男女の親族ではない。3つの会場があった期間中、Kは婚約ビンゴには行かなかった。筆者が婚約ビンゴのほうがいいのではないかと言ったところ、「教会ビンゴのほうに私は行きたいのだ」と語った。理由を聞いたが、「(筆者に対し)婚約ビンゴに行きたかった

ら、行ってもかまわない」と述べただけで、理由を言わなかった。筆者がBと一緒に婚約ビンゴに行ったところ、Kはしきりに「どうだった」と聞いてきた。そこで筆者が「すぐに負けてしまって、お金が無くなったので帰ってきた」というと、「そうか」と笑い、周りの人に筆者とBが負けてお金が無くなったことを話していた。Kは婚約ビンゴのほうを気にはしていたが、自らは行かなかったのである。そして、KはT、A、Mとともに教会ビンゴに行っていた。

T、A、K、Mは婚約する男女の親族ではなかった。そして、3つの会場ができた期間中、常に教会ビンゴへ行っていたのである。これは、T、A、K、Mはいずれも教会ビンゴを主催している教会の成員であるからである。つまり、期待値の高い婚約ビンゴにKが行かなかったのは、Kが教会の成員であり、婚約する女性とは関係性がなかったため、婚約ビンゴに行かなかったのだと考えられる。

T、A、K、Mが教会ビンゴへ通ったのは、自らが所属する組織の活動に参加することが重要であることを示している。そして、Bは婚約する女性と親族関係であるため、婚約ビンゴに行っていた。婚約する男性側の親族は男性の親族が集まる教会ビンゴへ、女性側の親族は女性の親族が集まる婚約ビンゴへ行っていた。そして、婚約する男女と親族関係にない人々は、所属する宗派の教会ビンゴへ通っていた。

これらのことから、社会的な要因はビンゴ会場を選ぶ上で重要視されていると考えられる。また、人々は所属する社会組織が主催する会場が複数ある場合は、より強い関係性のある会場を選ぶのだ。

4 - 2 ビンゴに行く要因とは

距離的要因、金銭的要因、規模的要因、社会

的要因について考えてみた。ビンゴの会場を選ぶさいに、家から一番近い会場を選ぶことはなく、遠い人では2つ先の村から歩いて通う人もいたことから、距離は会場を選ぶ要因ではないと考える。金銭的要因に関しては、ジャックポットの額が大きくなった時にだけ婚約ビンゴから教会ビンゴへと人が流れたことから、得られる配当金の額が高ければ要因となるが、そうでなければ会場を選ぶ要因とはならないと考えられる。

規模に関しては、人数の少ない会場のほうが勝つ確率が上がるにもかかわらず、人数の多い教会ビンゴを選んでいる人が多くいた。これは、ビンゴへ行くのはお金を得るためではないということの意味している。

教会ビンゴは婚約する男性側の親族が、婚約ビンゴは婚約する女性側の親族が多く参加していた。つまり、ビンゴへ行く要因としては、お金を稼ぐためではなく、社会関係が要因となっている。そして、社会的な要因が規模の大きさの違いを生み出していると考えられる。

距離的な要因はなく、金銭的要因はジャックポットの額が高ければ要因となる。普段は、金銭的要因は重要視されていない。むしろ、社会的な要因が会場を選ぶ際に強く働くのである。

では、金銭的な要因などと比べて社会的要因が重要視されているのは、なぜなのだろうか。ビンゴゲームの主催者の存在と、お金の行き先を見ながらこの問題を考えてみたい。

4 - 3 主催者と金の行き先

ビンゴゲームのなかには、主催者が明確で教会の運営資金や冠婚葬祭の資金を賄うという目的をもつものがある。例えば、アベリアン島スワラブ村でおこなわれていたビンゴゲームは、カトリック教会が主催していた。教会が主

催するビンゴゲームは、教会がもつマネアバで行なわれる。賭けられたお金は、ジャックポットを含む配当金を除いて、教会の取り分となり、教会の運営資金となる。

また、婚約式のために人が集まった民家でビンゴが行なわれていた例では、婚約する女性側の家が主催していた。集まったお金は、婚約式と結婚式のための資金となる。このように、主催者側がある目的のために資金を必要とし、ビンゴを行なっているのである。

ある人の話では、「ビンゴは常に行なわれていたわけではなく、ときどきなくなることもあり、必要となればまた再開する」ということであつた。教会マネアバでのビンゴは、現在恒常的に開かれているが、過去に何度か数ヶ月という単位で開かれなくなったことがあるという。しかし、必要性があつて再びビンゴが行なわれるようになったということであつた。ここでいう必要性というのは、主催者側のお金の必要性なのである。

キリバスにビンゴゲームが持ち込まれたときはすでに、教会の運営資金調達という目的を帯びていた。今では、教会だけでなく、冠婚葬祭などお金の必要に迫られたものがビンゴゲームを主催するようになったと考えられる。

しかし、キリバスで行なわれているビンゴゲームは、上記のような資金調達目的のものばかりではない。資金調達を目的としたものではなく、純粋にギャンブルを目的としたものがあるのだ。資金調達を目的としたものは主催者がいる。しかし、ギャンブルを目的としたものは主催者が明確ではないのである。

主催者が明確でないビンゴ会場は、次のようなものである。スワラブ村の高校ビンゴや他の小規模で短期間のみ行なわれていたビンゴでは、主催者が特におかれていなかった。集まっ

た人の中で、順番に主催者の役割をまわしてゲームを取り仕切り、ビンゴを行っていた。配当金を除いてたまっていくお金は、きりのよい額になるとジャックポットとしてゲームの賞金として配当された。そして、最終日の最後のゲームで、残りのたまっていたお金全てが配当金となった。このような会場でのビンゴは、ギャンブル的な要素が強いと思われる。そして、このビンゴは娯楽のために開かれていたと思われる。

4 - 4 ビンゴの目的とは

キリバスで開かれているビンゴゲームには、主催者が明確に存在するものと、明確に存在しないものがある。そして、主催者が明確なものは、教会ビンゴのように開催が常態化されており、参加者人数も多い。例外として、婚約ビンゴなど冠婚葬祭にともなうビンゴゲームは、一時的に開かれるが、主催者が明確に存在する。一方、主催者が明確でないものは、不定期にしかも一時的に開かれ、参加者人数が前者と比べ少ない。

主催者のあるビンゴゲームで参加者人数が多く、主催者のないビンゴゲームで参加者人数が少ないことは、ビンゴゲーム会場を選ぶさいの要因と一致する。主催者のあるビンゴゲームは社会的要因が強い会場であり、主催者がないビンゴゲームは金銭的要因が強い会場である。主催者が明確に存在するビンゴゲームは、主催者がお金の必要にせまられて開いている。そして、人々は金銭的要因よりも、社会的要因を重要視している。

これらのことから、キリバスのビンゴゲームでは、参加者自らがもうけるためにビンゴゲームに参加するのではないということがわかる。ビンゴゲームの参加者は、ビンゴゲームを主催

している社会組織の成員としてビンゴゲームに参加し、ビンゴゲームでお金を使うという行為を共有し、所属する社会組織にお金を渡すということを目的としているのではないだろうか。

5 考察

どの文化においても、理由なく直接お金を渡すという行為には社会的に少なからず問題があり、それを巧妙に忌避する手段が用意されている。たとえば、日本の祝いの席において、祝儀は装飾の施された紙に包まれる。お金を直接目に触れないようにして、相手に渡されるのだ。また、モノを介在させることによって、お金を渡すというやり方もある。竹川によるとクック諸島マンガイア島では、畑に行けば誰でも手に入られる農作物が、マーケットで高値で売られているという。これは、何らかの理由で現金を必要とする人々が農作物を売り出し、とりあえずお金に困っていない人々が買うことで、相互扶助的なやりとりが行なわれているためだという(竹川 1997)。時に包み隠すことによって、時にモノを介在させることによって、お金は受け渡される。このように多くの社会で現金は、価値を表象する交換財にとどまらず、それ自体シンボリックな性質、あるいは呪物的性質を持つものとして扱われているのだ。

キリバスにおいても、お金を渡すという行為は慎重に行なわれる。しかし一方で、ビンゴゲームにおけるお金のやりとりは非常に活発である。見方を変えれば、これはビンゴゲームを介在させることにより、お金のやりとりの敷居を下げていると考えることができる。

以下、考察として、キリバスにおけるビンゴゲームがもつ集金システムとしての側面、相互扶助的な寄付行為としての側面について触れ、

ビンゴゲームを介在させることにより、現金贈与がいかに可能になっているのかを述べておきたい。

5 - 1 集金システムとしてのビンゴ

ビンゴゲームはかつてヨーロッパ貴族の娯楽であった。ビンゴゲームは 20 世紀にはいつてアメリカに渡り、カトリック教会の資金調達のために行なわれるようになった。キリバスにビンゴをもたらしたのは、カトリック教会であると思われる。キリバスにもたらされた時点で、組織の集金システムという性格を帯びていたのである。

キリバスにおいてカトリック教会のみで行なわれていたと思われるビンゴゲームは、のちに他の社会組織でも取り入れられた。それが、婚約ビンゴで見られたような冠婚葬祭ビンゴである。組織を運営するための資金や、冠婚葬祭の費用を必要としたとき、ビンゴゲームは開かれる。現在では常態化している教会ビンゴは、教会の運営費や、建物の建造費、修理費などを賄うために行なわれている。また、婚約ビンゴのように臨時で費用が必要となったときに、ビンゴを開くものもある。このように、キリバスでは集金を目的にビンゴゲームが開かれ、主催者が資金を得ているのである。

さらにキリバスのビンゴゲームで注目すべき点は、資金調達を目的としたビンゴでは女性の割合が高く、ギャンブルを目的としたビンゴでは、男女の割合が同等かもしくは男性の割合が高くなるのである。スワラブ村の高校ビンゴでは男性の割合が 6 割であり、他のギャンブルを目的としたビンゴでも、男女の割合が半々であった。これらのことから、女性は社会的要因を重視してビンゴゲームに参加し、男性は金銭的要因を重視してビンゴゲームに参加してい

るといえる。ビンゴゲームにおいて、女性は組織への参加を重視し、ビンゴゲームでお金を使うことによって組織に貢献している。一方、男性はゲームとしてビンゴゲームに参加し、自らのもうけを求めているのである。

では、男性は自らが所属する社会組織に金銭面で貢献していないのだろうか。確かに、男性は女性に比べてビンゴゲームの参加率が低い。しかし、金銭的な貢献で見ると、男性たちは饗宴(botaki)など公の場で、周囲に見える形で多額のお金を組織に渡しているのである。特に、教会で開かれる饗宴(botaki)では、男性が周囲に目に見える形でお金を寄付をしたり、あるいは誰がいくらお金を寄付したか教会幹部の演説のなかで紹介される。男性は公の場で、目に見える形の貢献をしているのだ。

キリバスで行なわれているビンゴゲームは、お金を必要とする社会組織の集金システムとして根付いている。そして、女性はビンゴゲームに参加することで、男性は公の場でお金を渡すことで、金銭的に組織に貢献している。したがって、キリバスの人々は一方的にお金を搾取されているのではない。むしろ、ビンゴゲームに参加すること、あるいは饗宴(botaki)を開き参加することは、参加者が主体的に行なっているのである。

5 - 2 ギャンブルに隠された寄付行為

第 3 章では、熱心にビンゴに通う女性たちについて述べた。女性たちは毎日のようにビンゴに通い、ある一定の額を使い果たしていたのである。その額は月収の 1 割から 2 割におよぶ。加えて、女性たちはビンゴゲームで勝ったとしても、配当金をその日のうちにビンゴゲームで使ってしまう。高額な配当金を得たときには、まとまった額を手に入れることができるが、そ

れまでのゲームに賭けた金額には及ばない。

第4章では、ビンゴに行く目的を考えるため、4つの要因をもとに分析を行なった。その結果、社会的な要因でビンゴ会場を選んでいることがわかった。金銭的要因の低さは、女性たちが儲からないビンゴに熱心に通っている姿に象徴される。ここから人々がビンゴゲームをするのは、ビンゴを主催する組織または人へ、お金を渡すという目的が見えてくる。

すなわち、女性たちがビンゴゲームに熱心に通い、お金を使っているのは、その行為が寄付に相当すると考えられるのである。第3章で、10日間でビンゴゲームに50ドルも使ってしまい、娘に笑い者にされた例をあげた。50ドルといえば、島の生活では大金である。しかし、50ドルもの大金をビンゴゲームで使い果たしてしまったにもかかわらず、彼女の娘たちは怒ることもなく、あきれて笑っているのである。「ビンゴゲームでお金を使い果たしてしまった」ではなく、「教会に寄付をした」とすれば、このような娘たちの反応にも不自然さはない。つまり、女性たちは表向きにはギャンブルもしくは娯楽を目的としているが、実質的には寄付を目的としてビンゴゲームを行なっているということである。

ビンゴゲームが寄付を目的としたものと考えれば、毎日のようにビンゴゲームに通いお金を使う女性たちの行為についても説明ができる。女性たちのお金を使うという行為は、寄付なのである。寄付であるから、月収の1割から2割近くを使ってしまっても、女性たちの中では「寄付をしたのだ」と考えればすむのである。言い換えれば、教会ビンゴへ通う女性は「教会に貢献している」のだ。

キリバスの女性は、社会組織の活動に熱心である。熱心に社会組織の活動に参加することと、

熱心にビンゴゲームをすることは、社会組織に貢献しているという意味で同等なのである。

5 - 3 可能になる現金贈与

キリバスにおいて、男性は組織に対して公の場で、しかも目にみえる形の現金贈与を行なっている。目に見える形で組織に貢献することで、男性は周囲に鷹揚さ(tituaraoi)を示すのである。風間は、平等性や集団メカニズムの卓越する社会の中で、個人は所有物を他者に鷹揚に分け与え、社会集団に供出することが求められている(風間 2003)と述べている。男性がビンゴゲームに参加することは、強欲(ngenge)であるという評価につながりかねない。その点で、男性の規模の大きく常態化したビンゴ会場への参加が抑制されている可能性がある。特に高齢の男性がビンゴゲームに参加しないことや、男性の割合が高い会場が不定期の一次的なものであることから、金銭のやり取りが周囲に明確に示すことのできないビンゴゲームは、男性にとって社会的に難しい行為なのかもしれない。

一方、女性にとってビンゴゲームは、お金を使っているという行為を周囲に見せることのできる場であると考えられる。饗宴(botaki)などの公の場で、女性が周囲に見える形で金銭をやり取りすることは非常に稀である。夫が外国の貨物船や漁船で働いていたり、首都に働きにでている女性は、収入が多く周囲から妬み(bakantang)をかいやすい。それゆえ、ビンゴゲームはお金を使っているという行為を周囲に見せることのできる格好の場なのである。個人が財を貯めることよりも、散財することが望ましい社会においては、ほかの女性たちにとっても同様である。女性たちは、現金のやりとりを活発に行うことで、周囲から嫉妬や妬みを回

避している。

ビンゴゲームは、寄付という社会組織への貢献という側面とともに、お金を散財するためという側面を持つ。また、表向きがギャンブルであるがゆえに、活発な現金のやりとりが行なわれ、寄付であるという理由をも曖昧にしているのだ。

終章 結論

キリバス社会では、ビンゴゲームが集金システムとして働いている。カトリック教会の集金システムとして持ち込まれたビンゴゲームは、様々な社会組織において臨時的集金目的で開かれていたのである。そして、参加する人々は金銭的要因ではなく、社会的要因を重視して、ビンゴゲームの会場を選んでいる。

熱心にビンゴに参加し、お金を使っている人々は、お金の必要にせまられた社会組織や集団に、寄付するという目的を持っているのだ。これらの行為は、参加者の所属する社会組織に対する貢献であり、奉仕である。そして、相互扶助的の行為なのである。これらの行為が、ビンゴゲームを介在して行なわれているのだ。あるいは、ビンゴゲームによってお金の持つ象徴性が剥ぎ取られることによって、お金のやりとりが可能になっていると言えるかもしれない。

ビンゴゲームに熱中していた女性たちは、寄付を目的としてゲームに参加している。しかし、当人たちがビンゴゲームへ参加するのは寄付が目的であると語ることはない。逆に、「お金を稼ぎに行こう」などと、お金を得ることが目的であると語る。キリバスにおいてビンゴゲームは集金システムとして存在し、女性たちは表向きにはギャンブルとして、娯楽として楽しんでいる。しかし、そこには寄付という社会組織への貢献と、キリバス社会の平等性が隠され

ているのである。

謝辞

この論文を完成させるにあたって、筑波大学の風間計博先生には、お忙しい中非常に適切な助言をいただき感謝している。また調査中、アピアン島スワラブ村のアタウエア氏をはじめとする全ての方々、とくにカイエ・アカマさんには大変にお世話になった。ここに記して深く感謝したい。

引用・参考文献

風間計博

- 1999a 「貧困のうみだす高価な集会所」佐藤浩司編『住まいはかたる』京都：学芸出版社
- 1999b 「タピテウエア・サウスにおけるマネアバ(集会所)の多様化 外部論理の遮断・変換・摂取」『国立民族学博物館研究報告 24 巻 1 号別冊』
- 2000 『窮乏の民族誌 中部太平洋・キリバス南部環礁の社会生活』岡山：大学教育出版

吉岡政徳

- 1985 「Polythetic Category としての Koraki - キリバス、マイアナ島の Kin Category」『東南アジア・オセアニア両地域の文化・社会の基層における比較と分析』研究中間報告書』東京大学 pp.133-141
- 1993 「キリバスにおける性関係」須藤健一、杉島敬志編『性の民族誌』人文書院

竹川大介

- 1997 「クック諸島マンガイア島における

マイナーサブシステムとしての
漁労活動 - 生業活動と貨幣経済
のはざままで - 』 『北九州大学開学
50周年記念論文集』

モーリス・ゴドリエ

2000 『贈与の謎』 法政大学出版局

Roger Snowden

1986 Gambling Times Guide to
Bingo :Gambling Times

Oceania Population

2002:Secretariat of Pacific Community

国立歴史民俗博物館編

1998 『お金の不思議 - 貨幣の歴史学』 山
川出版社

今西仁司

1994 『貨幣とはなんだろうか』 ちくま
新書

ナイジェル・ドッド

1998 『貨幣の社会学』 青土社